

R2 地域協働研究（ステージI）

R02- I -29 「いわて塩の道 野田街道の歴史と文化の検証」

課題提案者 岩手県盛岡広域振興局

研究代表者 盛岡短期大学部 松本博明

研究チーム員 岩淵謙悦・小岩幸恵（盛岡広域振興局経営企画部）

<要旨>

本研究は、沿岸北部の野田村から久慈市（旧山形村）、葛巻町、岩手町沼宮内を経て、盛岡へと至る「いわて塩の道」（野田街道塩の道）について、この歴史的な広域交易道が沿線地区にもたらした文化的、経済的影響を検証してその成果を冊子として刊行するとともに、史跡の保存活用に資する方法を考察するものである。

本年度は、これまでに実施された関係者への聞き取り、実地調査の成果を基盤に、得られた知見、聞き取りデータ、文献資料の内容などを総合的に検証・文章化し、実地写真を加えた『いわて 塩の道 早わかり帖』を製作、発行した。本研究に協力いただいた方々をはじめ「塩の道」の保存等に尽力される関係者、各市町村担当者などに配布、それぞれのイベント、講演会その他における活用を目指している。

1 研究の概要（背景・目的等）

塩の道としてかつて利用された街道の一つ、野田村から久慈市（旧山形村）を通り盛岡市へと続く野田街道。この歴史的遺産・資源を軸に、広域的な連携による文化検証、保存、地域づくりを効果的な取り組みを進めていくために、野田から盛岡に至る全域の検証が不可欠であり、更には周辺の地域に与えた影響の歴史的・文化的意義を明らかにすることが求められている。資料や古道の滅失を防ぐうえでも早急に取り組む必要がある。またいわての「塩の道」を単に歴史文化資源として解説するだけでなく、各時代、それぞれの関係地域の生を支えた産業・流通資源として、普遍的価値（全国のおよび国際的な価値）に落とし込むことによって、新たな価値評価を生み出す機縁となる。

2 研究の内容（方法・経過等）

実地調査による聞き取り、資料収集、確認などを中心に「塩の道」に関わる歴史、文化、暮らし（民俗）、産業、流通など、「塩の道」にかかわる様々な事象について、有機的連関を持たせながらとらえ、収集し、整理分析することを手法とした。分野を限ることなく、大きな「機能」としてこの道をとらえ、その価値を浮き彫りにする。整理すると以下のようになる。

- ・野田村から盛岡市に至る野田街道の道標、史跡の確認
- ・地域の関係者、有識者への聞き取り
- ・現存する資料の収集とまとめ

これらをまとめてパンフレットとして発行した。

3 これまで得られた研究の成果

塩の道とは

生物の生存に不可欠の塩を、生産地である海岸地域から内陸に運ぶ交易路である。塩を下ろした復路には、内陸の米、山の産物、木材時には鉱物資源を沿岸に運ぶ役割を果たした。「塩の道」とは言いながら、内陸と沿岸とを結ぶ重要な交易路として機能したのである。例えば、日本海側の糸魚川市から、大町、安曇野を経て松本、塩尻へと至る千国街道。愛知

県岡崎市から足助、浪合、飯田、駒ヶ根、伊那、辰野を経て塩尻へ至る足助、三州街道など、全国各地に存在する。ここ岩手でも複数の塩の道が人々の暮らしを支えてきた。

「いわて塩の道」の中でとくに有名なのが野田塩の産地野田村から藩都盛岡に至る道である。三陸沿岸は切り立った地形と冷涼な気候のため、一般的な入浜式塩田が発達せず、鉄釜による直煮式による塩の生産が行われた。野田村は、近隣に鉄鉱山を擁し、古くから製鉄が盛んであった九戸地方で産する安価な鉄釜を利用し、良質の塩を産出していた。野田村の十府ヶ浦で生産された塩は「塩の道」を通して藩都盛岡に運ばれる。この道は、歴史的にみても、塩だけでなく鉄鉱石、鉄製品、米などが行き来する沿岸と藩都を結ぶ重要な交易路として機能した。

野田と盛岡の間に立ちのぼる北上高地、この急峻な山々を超え、縫うようにして続く道は、馬ではとても越えられない。荷駄はすべて南部牛の背に付けて運ばれた。南部牛は中世に田名部の領主によって蒙古韃靼地方から輸入された牛の末裔と言われ、丈夫で寒暑粗食に耐えしかも従順であった。北上高地の厳しい道を行く荷駄使役には最適の品種であった。

荷駄牛は通常3歳以上の牡牛7頭（ヒトハズナ）を繋いで一隊列とした。牛方が後ろについて隊列を差配する。その繋ぎの順番は決まっており、牛の強弱に応じてつないだ。一番強い牛（ワガサ）を先頭に立たせると、他の牛はその牛に従順に従って歩いたという。久慈市山形で盛んな闘牛は、牛の強弱を見分けるためにそもそも始まったとされる。

塩の道の経路

野田から盛岡に至る塩の道は複数あって、そのうち野田から安家を経て岩泉に抜け、そこから現在の小本街道に沿って小川、門、三田尻を抜け早坂峠を越えて藪川、米内、浅岸を経て盛岡城下に入る道（本野田街道）と、野田から下戸鎖、小国、陸中関、葛巻、椈の木、尾呂部、沼宮内と辿って、盛岡に南下する経路（沼宮内廻野田道・通称野田・久慈街道）があった。また、野田・久慈街道は、関宿で南北に分岐し、北が久慈街道、

南が野田街道に分かれ、どちらも塩の道として機能した。野田・久慈街道の経路は、白石峠、卯坂峠、角掛峠、平庭峠、黒森峠と急峻な峠をいくつも越える厳しい道であった。

野田から盛岡城下までは約27里半（110^{キロ}）1頭当たり約100^{キログラム}の荷を乗せ、6泊7日で盛岡城内に入ったという。

戦後運搬のスピードが求められるようになると、荷運び業務は馬や自動車にとってかわられ、牛方は徐々に減り昭和30年頃にはすっかり姿を瀕した。

野田塩

元治年間（1864年～65年）ころ作成の「盛岡藩産物番付」に「野田 北塩」「田名部 売牛」と出てくるほど、野田塩と牛はこの地域の重要な産物であったことがわかる。牛に塩を積んで交易をする、最後には牛も併せて売ってくる、といういわて塩の道の特性は、こうした1級の産物が支えていたことになる。

野田村には藩政末期に8工の塩釜があって、年間200回ほどの製塩を繰り返した。一釜1回につき4石の塩を生産していたというから、年間生産量は計算上6400石という生産量となる。野田塩の生産は塩専売法が施行される明治37年12月まで行われた。その後昭和18年、戦時中特例法によって自家用製塩が許可されると、前浜は100か所以上の製塩釜が乱立し、その煮炊きのために付近の山が裸山になるほどだったという。

のべ鉄

割沢鉱山や久慈大谷鉄山など九戸地区が算出する粗鋼や延鉄は、来満峠を越えて、塩や魚とともに鹿角に運ばれた。鉄材は幅2寸、厚さ1寸、長さは6尺か9尺で、牛の背に乗せやすく扁平な形をしていた。こうした鉄材は多く農機具の素材に活用され肥草を刈るに適した「鹿角鎌（一文字鎌）」に鍛錬され、南部藩領から仙台、津軽、秋田藩領にまで広く流通した。尾去沢銅山、小坂銀山での鉄材の需要もあり、鉱山景気に乗って野田鹿角間の交易は『鹿角へ行く」と塩1升が米10升になった』といわれるほどであったという。帰りは米、酒、さらには尾去沢銅山産出の銅などを運んだ。

鉄は、遠く越後へも牛の背に載せて搬出され、当地の金属加工、鍛冶工業を支えたといわれている。この際荷を運んだ南部牛は当地で高く売って帰郷したという話も伝わる。

南部牛と岩手短角牛

南部牛は享徳3年（1454）陸奥田名部の領主が、蒙古韃靼地方から軍馬と牛を輸入したのがはじめとされ、その末裔が南部牛の成立に関わったとされる。その後南部牛は、丈夫で寒暑粗食によく耐え、従順な性格から、荷駄使役に最適な牛とされ、岩手における塩の道を中心とする交易運搬に広く使われるようになった。その後、明治4年に導入されたイギリス原産のショートホーン（短角種）との交配による品種改良が進み、短角牛にとってかわられ、今南部牛は見ることができない。

短角牛は、ショートホーン種と南部牛との交配による品種改良の結果誕生した牛で、昭和32年日本で4番目の和牛品種（日本短角種）として登録された。母乳のみで子育てがで

きること、稲わらなどの粗飼料主体で飼育できること、放牧特性が高く山間地の牧野を活用できることなどの利点から、北上高地に適した品種として選ばれ、藩政時代の飼育法である「夏山冬里」「牧牛繁殖」の手法によって飼育されてきた。肉質は赤身が主体で、飼育数は少ないものの、昨今の健康志向から高級ブランドとして高く評価されている。

闘牛

荷駄牛の隊列は通常7頭で組む（ヒトハヅナ）。その際、最も強い牛（ワガサ）を先頭に立てると、他の牛は先頭の牛に従って歩を進めることから、牛方は牛の強弱を見極めるために、角突き（闘牛）を行ったとされる。観光目的として闘牛が行われたのは昭和35年。その後昭和58年に平庭高原闘牛会が組織され、闘牛の運営を行っている。現在は春・夏・秋の3回行われ、全国から牛好きの勢子や観光客が訪れる。

撫牛

撫で物信仰の一つ。自らの身体の悪い部分を撫でて、そのあと牛を撫でると、その悪い部分が牛に移って快癒するという信仰で、古く人形（ヒトガタ）で罪や穢れを移して流す禊祓いに起源をもつと考えられる。撫牛の信仰は、牛とかかわりの深い大黒天信仰や牛頭天王信仰、さらには天神信仰と習合し、これらの社には多く撫牛が安置されている。

盛岡市鉾屋町の千手院に伝わる物語。200年ほど前の話。暑さのあまり川に入り荷の塩を水に溶かしてしまった牛が、怒った牛方に追われて命からがら当院に逃げ込んだ。牛方清右エ門は怒りに任せて牛を懲らしめようとしたが、千手院5代萬円和尚に諭されて改心。亡くなった牛の供養にと南部鉄12貫で鉄のペコを作り千手院に奉納したという。奉納された撫ペコはその後多くの人々の交通安全・身体堅固の守護として撫でられ続けている。実際牛が逃げ込んだのは、山岸にあった西光院であったともいう。

4 今後の具体的な展開

調査研究成果を可視化してパンフレットとして発行することができた。今後はこの冊子を活用して、観光開発、地域づくりに活用していきたい。

また、今回の調査研究で発掘した資料は、すべてデータベース化して、保存、今後の研究の基礎とする。

5 その他（参考文献・謝辞等）

岩手県教育委員会『岩手県「歴史の道」調査報告 久慈・野田街道』1982／田村栄一郎『みちのくの砂鉄いまいずこ』久慈砂鉄の会、1987／葛巻町・山形村観光協会『塩の道 野田街道』2002／真砂遠路『塩の道—南部牛追い唄の道を行く』2008

また、資料収集、情報交換会、聞き取りなどを通じて、本研究に協力いただきました「いわて塩の道」関係者の皆様に御礼申し上げます。

（詳細『いわて 塩の道 早わかり帖』を参照）